

ラストベルトの最大都市デトロイト 大都市圏の人口分布と人種構成の変化

樋口 忠成*

要旨

デトロイトは近年人口減少により衰退するラストベルトの最大都市である。デトロイト大都市圏が人口のピークを迎えた1970年から人口は停滞・減少し、その大都市は雇用の喪失とともに人口減少に見舞われた。本稿では、衰退するデトロイト大都市圏で人口分布がどう変化しているかを分析した。デトロイト大都市圏では、中心市の急速な人口減少がみられ、郊外では人口が増加しているものの、それは中心市の人口減少を補うほどではなく、大都市圏の衰退が進んでいることと、主要な郊外都市でも人口減少に見舞われることが多いことがわかった。また1970年頃の人口の大きな動きはデトロイト市内の黒人人口の急増に伴う郊外への White Flight であり、郊外の白人専用居住地域とデトロイト市内の黒人専用住宅地域という人種的分断が地理的分断と重なっていた。現在ではデトロイトからの黒人の郊外化 Black Flight に伴い、デトロイト市の空洞化がさらに進行しているものの、白人専用だった郊外住宅地での人種的融合が進行している状況が確認できた。

キーワード：デトロイト、ラストベルト、都市の衰退、郊外化、人種的分断

I はじめに

アメリカ合衆国ミシガン州デトロイトは、モーターシティといわれ、アメリカの自動車産業がこの地で生まれ発展した自動車の中心都市である。今もビッグスリーとして名をとどろかせているアメリカの三大自動車メーカーはこの地に本社を構えている。特にゼネラルモーターズ(GM)の本社はデトロイトのダウントウンに威容を誇るルネサンスセンターにあり、今もデトロイトが自動車の都市であることを象徴するものとなっている。またフォードモーターはデトロイトに隣接するディアボーンに本社を構え、クライスラー(正確にはフィアットクライスラーオートモービルズ(FCA))は郊外のオーバーンヒルズに本社を置いている。しかし20世紀前半にその自動車産業の成長に伴って発展したデトロイトだが、1970年代以降自動車生産の国内での生産地域の拡散や海外生産の増加、さらには外国からの自動車の輸入増加に伴ってアメリカの自動車産業そのものが低迷し、その産業に大きく依存していたデトロイトは都市の人口減少を経験するようになる。

筆者はかつてデトロイトを研究対象に因子生態研究を用いた都市構造の分析を行い(樋口, 1979 a), また人種分布についても考察した(樋口 1979 b および樋口, 1982)。その分析データ

*大阪産業大学名誉教授 E-mail : thiguchi445@hotmail.com

として1970年人口センサスを主な資料として用いたので、今からほぼ50年前の転換期にあったデトロイトを研究したことになる。1970年頃のデトロイトは、力強いアメリカ経済の中核にあった自動車産業を象徴する都市であり、製造業を代表する大都市であった。しかしこの頃が大都市圏としてのデトロイトの最盛期で、それ以降は衰退と再生を繰り返しながら長期的な衰退を余儀なくされてきた。実際アメリカでは、1930年から1970年までニューヨーク、シカゴ、ロサンゼルス、フィラデルフィア、デトロイトの5都市が人口の上位5位までを独占し続け、しかもこの5都市のみが百万都市だった（1970年にはヒューストンが第6位で百万都市の仲間入りをしているが…）ので、デトロイトは長期間アメリカ五大都市の一角を担って都市システムの頂点を形成していたのである。しかしその後の急速な人口減少によって、最新の人口統計（2017年推計）ではデトロイトは市別人口では何と23位にまで落ちてしまっている。大都市圏人口でも1990年まではその五大都市が形成する五大都市圏の一つだったが、やはり2017年推計では14位にまでランキングを落とした。現代のアメリカ都市は、多くの都市でダウンタウン再生やライトレールや路面電車などの公共交通導入などの政策が功を奏して大都市圏中心市の活性化や人口回復が広範囲でみられる。しかしこの全国的な都市活性化傾向の中で衰退を続ける都市や大都市圏はどのように変化して来たのだろうか。筆者は21世紀初頭の段階のデトロイトに明るい兆しが見え始めたときに一度分析を試みたが（樋口, 2004）、その後リーマンショックがあり、デトロイト市の財政破綻（2013年）があり、その環境は大きく変化した。本稿では衰退が継続するデトロイト大都市圏内部での人口分布の変化を分析してその動向を明らかにしたい。

II アメリカ大都市圏の人口動向

デトロイト大都市圏の分析に入る前に、まず最近50年のアメリカ合衆国の大都市圏の人口動向を見てデトロイト大都市圏の位置づけを行いたい。アメリカ合衆国全体の人口は、この半世紀、少子化高齢化の傾向が少しはあるが自然増を維持しており、それに加えて社会増の点でも移民の数も増え、特に1990年頃以降は毎年ほぼ100万人の移民が流入しているので、人口は順調に増加している。しかし全国一律に増加したわけではなく、地域別の差異が著しい。アメリカ合衆国は、北東部、中西部、南部、西部の4つの地域に分割されるが、第1表はこの半世紀の間のその4つの地域別の人口変化をまとめたものである。この間アメリカの人口は1億2千万以上増加しているが、そのうち北東部と中西部の増加はわずかで、人口増加全体の15%にすぎない。人口増加の85%は南部と西部で吸収され、それぞれの地域はこの半世紀で人口がほぼ倍増している。

この人口分布の地域別の差異は、数十年前からの産業構造の変化に起因する雇用環境の変化に伴うものである²⁾。北東部から中西部にいたる重化学工業などの伝統的工業が比較的低賃金な地域への拡散したりや海外移転などによってその地域での雇用が減少し、また産業構造の転換に伴って新しいICT産業、航空宇宙産業、生命工学、医療技術などの先端技術産業がシリコンバ

ラストベルトの最大都市デトロイト大都市圏の人口分布と人種構成の変化（樋口）

第1表 アメリカ合衆国の地域別人口変化（1970-2017年）

地域	人口 1970年	人口 2017年	増加数 (1970-2017年)	増加率 (%)
全国 UnitedStates	203,302,021	327,167,434	123,865,413	60.9
北東部 Northeast	49,060,514	56,111,079	7,050,565	14.4
中西部 Midwest	56,590,284	68,308,744	11,718,460	20.7
南部 South	62,812,980	124,753,948	61,940,968	98.6
西部 West	34,838,243	77,993,663	43,155,420	123.9

第2表 アメリカ合衆国の人口増加率の高い大都市圏と低い大都市圏（1970-2017年）

大都市圏	人口 (1970)	人口 (2017)	順位	増加数 (1970-2017)	増加率 (%)
【人口増加率の高い大都市圏】					
1 ラスヴェガス (NV)	273,288	2,204,079	28	1,930,791	706.5
2 ケープコーラル・フォートマイヤーズ (FL)	105,216	739,224	77	634,008	602.6
3 オースティン (TX)	398,938	2,115,827	31	1,716,889	430.4
4 フェニックス (AZ)	967,522	4,737,270	11	3,769,748	389.6
5 オーランド (FL)	522,575	2,509,831	23	1,987,256	380.3
6 マッカレン・エディンバーグ (TX)	181,535	860,661	65	679,126	374.1
7 プロヴォ・オレム (UT)	142,350	617,675	91	475,325	333.9
8 ローリー (NC)	317,010	1,335,079	43	1,018,069	321.1
9 リヴァーサイド・サンバーナディーノ (CA)	1,143,146	4,580,670	13	3,437,524	300.7
10 デルトナ・デートナビーチ (FL)	173,941	649,202	87	475,261	273.2
11 ボイジーシティ (ID)	191,090	709,845	80	518,755	271.5
12 ノースポート・サラソタ・ブレイドントン (FL)	217,528	804,690	72	587,162	269.9
13 フェイエットビル・スプリングデール・ロジャーズ (AR-MO)	149,656	537,463	104	387,807	259.1
14 アトランタ (GA)	1,852,235	5,884,736	9	4,032,501	217.7
15 ヒューストン (TX)	2,195,146	6,892,427	5	4,697,281	214.0
16 ダラス・フォートワース (TX)	2,428,720	7,399,662	4	4,970,942	204.7
17 コロラドスプリングス (CO)	239,288	723,878	79	484,590	202.5
18 レークランド (FL)	227,222	686,483	82	459,261	202.1
【人口増加率の低い大都市圏】					
1 ヤングスタウン (OH-PA)	663,178	541,926	103	▲121,252	▲18.3
2 バッファロー (NY)	1,349,211	1,136,856	50	▲212,355	▲15.7
3 ビッツバーグ (PA)	2,759,443	2,333,367	26	▲426,076	▲15.4
4 クリーヴランド (OH)	2,321,037	2,058,844	33	▲262,193	▲11.3
5 スクラントン・ウィルクスバー (PA)	595,490	555,426	100	▲40,064	▲6.7
6 デトロイト (MI)	4,431,390	4,313,002	14	▲118,388	▲2.7
7 デイトン (OH)	815,547	803,416	73	▲12,131	▲1.5
8 トリード (OH)	607,163	603,668	92	▲3,495	▲0.6
9 シラキュース (NY)	636,507	654,841	85	18,334	2.9
10 アクロン (OH)	679,239	703,505	81	24,266	3.6
11 スプリングフィールド (MA)	583,031	631,652	90	48,621	8.3
12 ロチェスター (NY)	981,347	1,077,948	51	96,601	9.8
13 ニューオーリンズ (LA)	1,144,130	1,275,762	46	131,632	11.5
14 ミルウォーキー (WI)	1,403,688	1,576,236	39	172,548	12.3
15 セントルイス (MO-IL)	2,480,351	2,807,338	21	326,987	13.2
16 フィラデルフィア (PA-NJ-DE-MD)	5,317,407	6,096,120	8	778,713	4.6

(注1) 2017年の人口50万以上の大都市圏（107ある）のうち、1970～2017年の人口増加率が200%以上および15%未満の大都市圏を掲げた

(注2) 大都市圏は2017年現在の圏域で、1970年人口は2017年の大都市圏域で組替えたものである。

(注3) 順位は、2017年の人口50万以上の大都市圏の人口順位を示す。

(注4) 大都市圏の名の（ ）内は州名を示す。二つ以上の州にまたがるものもあり、例えばヤングスタウン（OH-PA）はオハイオとペンシルヴェニアにまたがっている。



第1図 アメリカ合衆国の成長する大都市圏と衰退・停滞する大都市圏

(注) 大都市圏の番号は第2表の大都市圏に対応する

レー、シリコンプレーン、シリコンデザートなどの名称に象徴されるように、西部や南部に集中して勃興し発展を遂げてきた。これによってアメリカの人口増加は温暖なサンベルトに集中して起こり、寒冷なスノーベルト（フロストベルト）が停滞するという対比の形で進行した。

こうした人口変化を大都市圏のレベルで見よう。第2表は、アメリカの大都市圏の人口変化を1970年と2017年で比較したものである。2017年現在の人口50万以上の大都市圏（全国で107ある）のうち、人口増加率が200%以上の大きく成長した大都市圏と人口増加率が15%未満の低成長もしくは衰退した大都市圏をリストアップしている。なお大都市圏域は半世紀の間に拡大しているものが多いが、ここでの1970年の大都市圏人口は2017年の大都市圏域で組み替えて用いている。またここにリストアップされた大都市圏の位置を示したものが第1図である。

この半世紀で最も人口増加率が高かったのはネヴァダ州ラスヴェガスで、その大都市圏人口は1970年の27万から220万へと8倍に急増して、地方都市レベルから大都市に変身した。カジノの都市からエンターテインメントやコンベンションを核としたリゾート都市への変身が都市成長の基盤となったのである。フロリダ州オーランドもまたディズニーワールドやユニバーサルスタジオ・フロリダなどのテーマパークを核としたリゾート都市化で50万都市から250万都市にまで成長した。またシリコンプレーンのテキサス州オースティン、シリコンデザートのアリゾナ州フェニックス、リサーチトライアングルのノースカロライナ州ローリーなどはITC産業の中心として、この半世紀にいずれも100万以上の人口を増加させた。またアトランタ、ヒューストン、ダラス・フォートワースの大都市圏は、いずれもこの半世紀の何と400~500万の人口増加

により、ニューヨーク、ロサンゼルス、シカゴに次ぐレベルの巨大都市圏に成長したのである。こうした人口増加率の高い大都市圏は、いずれも南部および西部のサンベルトに位置することが特徴である。

これに対して人口増加率の低い大都市圏は、いずれも北東部と中西部に集中し（ハリケーン被害がみられたニューオーリンズは例外）、スノーベルト（フロストベルト）に位置することが明らかである。特にこの47年間に10%以上の人口減少を経験したヤングスタウン、バッファロー、ピッツバーグ、クリーヴランドの4つの大都市圏は、製鉄都市という共通の都市機能をもっている。世界の製鉄の首都といわれたピッツバーグはこの半世紀にアメリカで最も人口が減った大都市圏で40万以上の人口を喪失し、全米9位の大都市圏（1970年）から26位（2017年）にまで凋落した。さらにこれら4つの大都市圏に次いで人口減少を経験したのが自動車産業が基盤のグループである。自動車産業の中心であるミシガン州デトロイトはもちろんのこと、リトルデトロイトの呼称もあるオハイオ州デートン、自動車のフロントガラスやウィンドーなどのガラス産業の中心だったオハイオ州トリードが人口を減らし、また自動車タイヤ生産の中心都市オハイオ州アクロンも人口が停滞している。ピッツバーグと同様、デトロイト大都市圏も全米5位（1970年）から14位（2017年）へと転落した。これら伝統的重化学工業を基盤とした衰退傾向にある大都市圏の集中地域がラストベルト（鉄さびベルト）なのである。筆者らはこれらの大都市圏を中心市衰退型・郊外低成長の停滞型大都市圏と類型化した（樋口ほか、2015）。

この人口減少に見舞われているラストベルトの大都市圏で最大規模を誇るのがデトロイトである。現在の大都市圏人口は430万で、1970年から10万人も減少した。次章ではそのデトロイト大都市圏の人口の推移を詳しく検証したい。

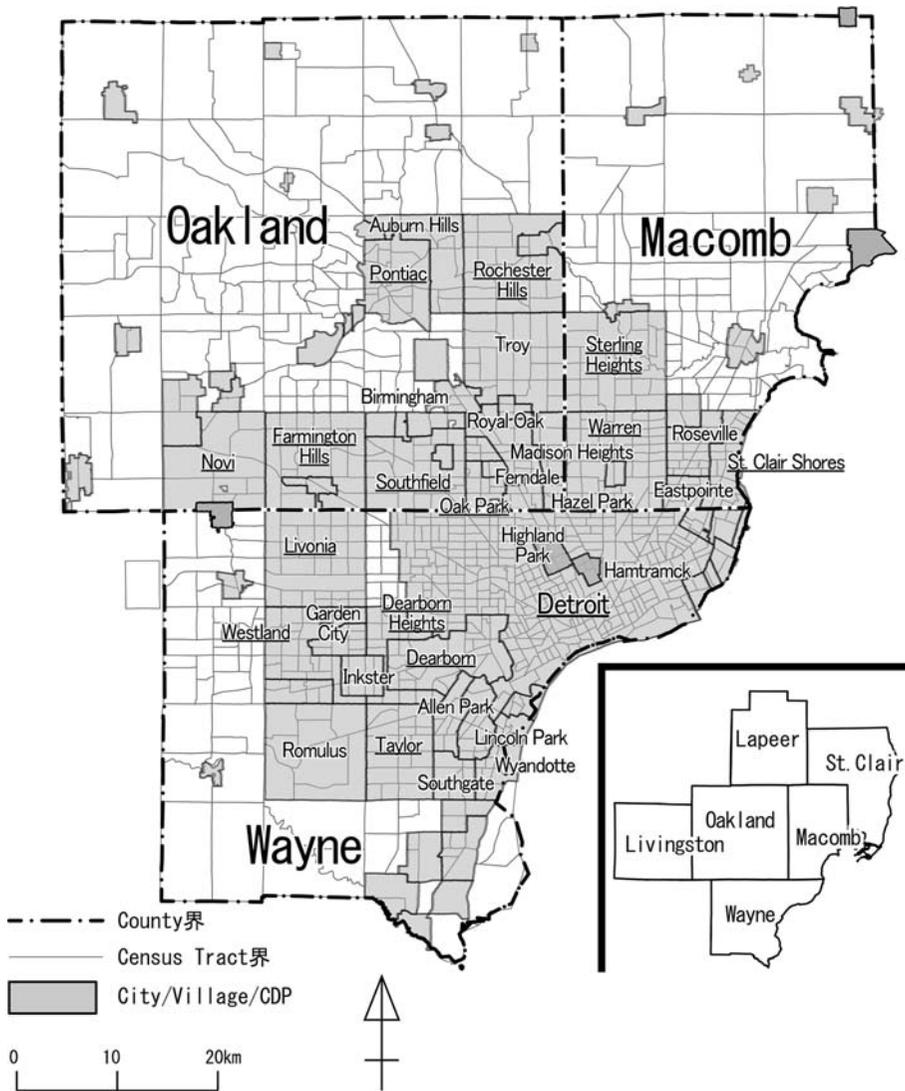
Ⅲ デトロイト大都市圏の概要

デトロイト大都市圏は、Detroit-Warren-Dearborn Metropolitan Statistical Areaが正式名称で、ミシガン州南東部の6つのカウンティから成っている。デトロイト市を含むウェイン Wayne とその北に隣接するマッコム Macomb、オークランド Oakland の両カウンティが中心カウンティで、これら中心カウンティの北東にあるセントクレア St. Clair、北のラピア Lapeer、西のリヴィングストン Livingston の3つが周辺カウンティを構成している。第2図は3つの中心的カウンティの詳細図を示し、右下に6カウンティの全体の簡略図を示している。1970年当時のデトロイト大都市圏は、現在の3つの中心カウンティのみによって形成され、デトロイト標準大都市統計地域 SMSA (Standard Metropolitan Statistical Area) と呼称されていた。6つのカウンティに広がった現在でも大都市圏人口の90%は3つの中心カウンティが占め、3つの周辺カウンティは合わせても10%にすぎない。

中心市はデトロイト市でウェイン・カウンティに属している。なおデトロイト市は、ハイランドパーク Highland Park とハムトラミック Hamtramck の2つの別の市を市域の中に包摂してい

る。デトロイト川に接したダウンタウンの北側に位置する2つの市はいずれも自動車工場を有したことから独立した市として存続したと考えられる。ハイランドパークは住民の大部分が黒人で占められ、またハムトラミックはポーランドの伝統行事も開催されるポーランド系移民の町として知られる都市である。21世紀に入るとハムトラミックはバングラデシュとパキスタンの移民が急増して急速にアジア化、イスラム化していると伝えられている。

デトロイトを取り巻いて周囲に郊外の市が形成されているが、多くの市が正方形になっているのがわかる。これはこの地域の開発にタウンシップ制が導入された名残りである。たとえばデトロイト市の西にあるリヴォニア Livonia は一つのタウンシップが市として独立したもので、東西、南北とも6マイル (9.6 km) 四方の正方形の自治体となっている。市になっていないところ



第2図 デトロイト大都市圏

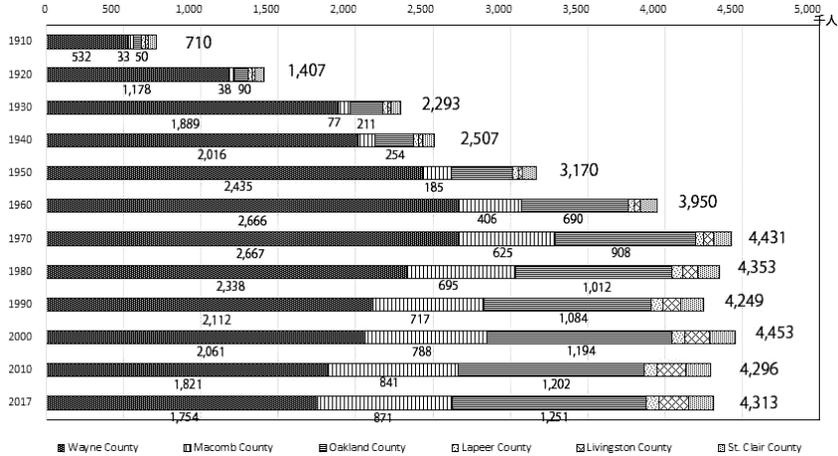
も多くはタウンシップの名前を冠した準自治体として機能しており、そうしたタウンシップにも住宅が広がっている。そうしてこの3つのカウンティの広がりや住宅地の連担地域である都市化地区がほぼ重なっている。一方でこの中心的カウンティの周辺にある3つのカウンティは農村的景観も多い。周辺カウンティの中で人口1万以上の市はセントクレア・カウンティにあるポートヒューロン Port Huron（人口3万人）のみである。

IV デトロイト大都市圏の人口動向

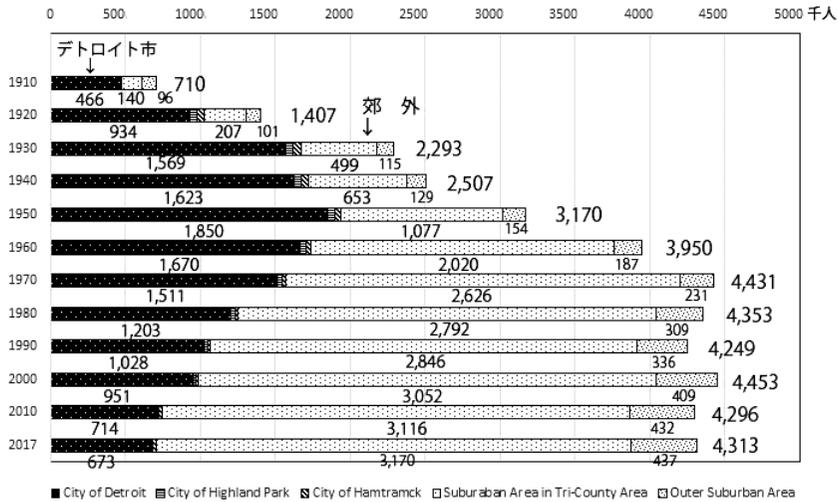
第3図がカウンティ別にデトロイト大都市圏の人口推移を示したものである。大都市圏人口は1900年の53万から400万人台を超えるところまで急成長したのがわかる。1903年のフォード自動車の設立に象徴される20世紀の自動車開発から1910年代のT型フォード生産のオートメーション工場化、1920年代のアメリカでのモータリゼーションに対応するように急速に人口が増加して、デトロイトは「世界の自動車産業の首都」として一気に大都市に成長した。第二次世界大戦後もその成長は続くが、しかし1970年に成長のピークを迎えた。大都市圏人口443万に達した後、大都市圏人口が減少しはじめるのである。

第二次大戦後も世界の自動車生産の8割を生産していたアメリカ合衆国の世界に対するシェアは、ヨーロッパや日本での自動車産業の成長とともに徐々に低下し、1960年には50%を割って1970年頃には30%近くになった。さらに1970年代の二度の石油ショックは大型車中心のデトロイトの自動車生産に打撃を与えた。自動車の生産減少と輸入拡大はデトロイトに雇用の縮小をもたらした。デトロイト大都市圏ははじめて人口減少を経験するようになった。失業率の増加は犯罪の増加をもたらした。人口減少は都市社会の荒廃に結びつくようになる。1990年代には景気の回復に伴い自動車生産も回復し、大都市圏人口も2000年には1970年を上回る445万まで回復したが、2000年代のリーマンショックは、GMの経営破綻と一時的な国有化、クライスラーの経営破綻とフィアットによる子会社化をもたらした。ビッグスリーの一つフォードは経営破綻こそなかったが、GMがオベルやボックスホールを手放したのと同様、ジャガーやボルボなどの海外ブランドの売却を余儀なくされた。このような自動車産業の低迷と縮小は、自動車産業に依存するデトロイトに再び人口減少をもたらした。2010年代に入り、自動車生産の回復とともに大都市圏人口も微増しているが、デトロイトの盛衰が自動車産業と密接に結びついているのは変わっていない。

さて第3図からカウンティ別の人口動向に考察を加えておくと、デトロイト市を含むウェイン・カウンティが20世紀前半においてはこの地域の人口の大部分を占めていたと考えてよい。しかしそのウェインの人口も1970年をピークとして減少しはじめ、その減少は現在まで継続する。また主要な郊外であるマッコームとオークランドの両カウンティの人口は1940年以降、顕著に増加しはじめ、現在まで一貫して増加の傾向にある。人口の10%を占める3つの周辺カウンティは20世紀後半は少しずつ人口を増加させたが、2000年以降はそれほど変化がない。



第3図 デトロイト大都市圏のカウンティ別人口推移 (1910-2017年)



第4図 デトロイト大都市圏の中心市・郊外別の人口推移

次にデトロイト大都市圏の人口動向を中心市と郊外に分けて見ておこう。第4図は、デトロイト大都市圏を、中心市としてのデトロイト市と郊外に分け人口の推移を示したものである。ただしセントクレア、ラピア、リヴィングストンの周辺カウンティのエリアは外周郊外として分けて示した。デトロイト市はデトロイト川の近くにダウンタウンがあり、そこから幹線道路が放射線に出ているが、ダウンタウンから西北西に延びる道路がウッドワード通りというメインストリートである。その通りに沿って周囲を完全にデトロイト市に囲まれてた互いに隣接する2つの市がある。それが前述したハイランドパークとハムトラミックであるが、中心市に準ずるものと考えられるので市でグラフでも独立して中心市に準ずる位置に配置し、中心市に準じて考察している。

このデトロイトの人口推移を中心市と郊外に分けて見ていこう (第4図)。デトロイトの成長によって郊外が形成され発展していわゆる大都市圏が形成され始めるのが1920年代だと考えら

第3表 デトロイト大都市圏内の市別人口動向（1950-2017）

city	county	1950	1960	1970	1980	1990	2000	2010	2017	増加率 1970-2017
Allen Park	Wayne	12,329	37,494	40,747	34,196	31,092	29,376	28,210	27,156	▲33.4
Dearborn	Wayne	94,994	112,007	104,199	90,660	89,286	97,775	98,153	94,491	▲9.3
Dearborn Heights	Wayne	20,235	61,118	80,069	67,706	60,838	58,264	57,774	55,758	▲30.4
Detroit	Wayne	1,849,568	1,670,144	1,511,482	1,203,339	1,027,974	951,270	713,777	673,104	▲55.5
Garden City	Wayne	9,012	38,017	41,864	35,640	31,846	30,047	27,692	26,650	▲36.3
Hamtramck	Wayne	43,555	34,137	26,783	21,300	18,372	22,976	22,423	21,752	▲18.8
Highland Park	Wayne	46,393	38,063	35,444	27,909	20,121	16,746	11,776	10,900	▲69.2
Inkster	Wayne	16,728	30,097	38,595	35,190	30,772	30,115	25,369	24,453	▲36.6
Lincoln Park	Wayne	29,310	53,933	52,984	45,105	41,832	40,008	38,144	36,655	▲30.8
Livonia	Wayne	17,634	66,702	110,109	104,814	100,850	100,545	96,942	94,105	▲14.5
Romulus	Wayne	24,857	22,897	22,979	23,989	23,457	...
Southgate	Wayne	...	29,404	33,909	32,058	30,771	30,136	30,047	29,084	▲14.2
Taylor	Wayne	70,020	77,568	70,811	65,868	63,131	61,276	▲12.5
Westland	Wayne	30,407	60,743	86,749	84,603	84,724	86,602	84,094	81,747	▲5.8
Wyandotte	Wayne	36,846	43,519	41,061	34,006	30,938	28,006	25,883	24,977	▲39.2
Eastpointe (East Detroit)	Macomb	21,461	45,756	45,920	38,280	35,283	34,077	32,442	32,511	▲29.2
Roseville	Macomb	15,816	50,195	60,529	54,311	51,412	48,129	47,299	47,501	▲21.5
St. Clare Shores	Macomb	19,823	76,657	88,093	76,210	68,107	63,096	59,715	59,635	▲32.3
Sterling Heights	Macomb	6,509	14,622	61,365	108,999	117,810	124,471	129,699	132,631	116.1
Warren	Macomb	42,653	89,246	179,260	161,134	144,864	138,247	134,056	135,022	▲24.7
Birmingham	Oakland	15,467	25,525	26,170	21,689	19,997	19,291	20,103	21,142	▲19.2
Farmington Hills	Oakland	58,056	74,611	82,111	79,740	81,050	...
Ferdale	Oakland	29,675	31,347	30,850	26,227	25,084	22,105	19,900	20,070	▲34.9
Hazel Park	Oakland	17,770	25,631	23,784	20,914	20,051	18,963	16,422	16,489	▲30.7
Madison Heights	Oakland	...	33,343	38,599	35,375	31,296	31,101	29,694	30,050	▲22.1
Novi	Oakland	9,668	22,525	32,998	47,386	55,224	59,715	517.7
Oak Park	Oakland	5,267	36,632	36,762	31,537	30,468	29,739	29,319	29,654	▲19.3
Pontiac	Oakland	73,681	82,223	85,279	76,715	71,166	66,337	59,515	59,792	▲29.9
Rochester Hills	Oakland	61,766	68,825	70,995	74,205	...
Royal Oak	Oakland	46,898	80,612	86,238	70,893	65,410	60,062	57,236	59,112	▲31.5
Southfield	Oakland	...	31,531	69,298	75,608	75,745	78,322	71,739	73,208	5.6
Troy	Oakland	...	19,402	39,419	67,102	72,884	80,959	80,980	83,813	112.6
Port Huron	St. Clair	35,725	36,084	35,794	33,981	33,694	32,338	30,184	29,051	▲18.8

太字は人口のピークを示している。なお Hamtramck と Highland Park は両市とも 1930 年が人口のピークになっている。

Eastpointe は 1992 年にそれまでの East Detroit が名称変更したもの

市が形成された年 1950 年代 - Madison Heights (1955), Troy (1955), Southfield (1958)

1960 年代 - Taylor (1968), Novi (1969), Romulus (1970)

1970 年代と 80 年代 - Farmington Hills (1973), Rochester Hills (1984)

れる。モータリゼーションの時代である。その頃から郊外住宅地の開発が進み郊外での人口が増え始めるが、デトロイト市も急成長していた。中心市のデトロイトが人口のピークを迎えるのが 1950 年で、人口は 185 万だった。その後は継続的に人口が減少し、2017 年にはピーク時の 3 分の 1 近くの 67 万にまでなった。デトロイト市の人口が減少しても、郊外化により大都市圏は人口増加を続け、1970 年までは成長を続けた。1960 年には郊外人口が中心市デトロイトの人口を上回っている。郊外はその後も緩やかな人口増加を続けるが、中心市のデトロイトの人口減少がそれを上回るスピードで起きることにより、大都市圏の衰退がこの半世紀のあいだ続いたのである。

郊外の各市の人口動向を市別に検討してみよう。第3表は、現在まで少なくとも 25000 人以上の人口を記録したことがある市をリストアップして 1950 年から 2017 年までの 10 年ごとの人口推移を示したものである。太字で示した数字が各市の人口のピークのもので、また右欄にはこの

47年間の人口増加率を示している。

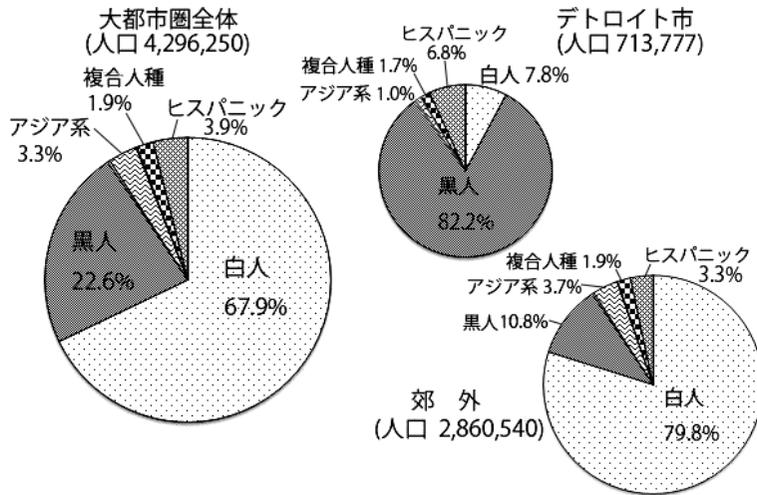
デトロイト市の人口が1950年をピークに減少し始めたが、ディアボーン Dearborn, リンカーンパーク Lincoln Park, ワイアンドット Wyandotte, ヘーゼルパーク Hazel Park のようにデトロイトに隣接する市は1960年をピークに人口が減少しはじめ、さらにセントクレアショアズ St. Clare Shores, ウォーレン Warren, ロイヤルオーク Royal Oak, リヴォニアといった人口の多い郊外都市でも1970年をピークに人口減少が始まっている。さらにここにあげた郊外都市の多くはこの1970年を人口のピークにしている。つまり、中心市の人口減少は郊外への人口転出が原因だったため郊外の人口増加をもたらしたが、まもなく中心市の人口減少が郊外にも波及して大都市圏全体の人口減少につながってきているのである。中心市から北や西に少し離れたスターリングハイツ Sterling Heights, トロイ Troy, ロチェスターヒルズ Rochester Hills, ノヴァイ Novi などは現在も人口増加が続いているが、その勢いは乏しい。第3表の1970年から2017年までの人口増減率をみると、多数の郊外都市でこの半世紀の間に人口が減少しているのがわかる。郊外全体では実際にはこの47年で20.7%の人口増加がみられるのに、表にあげた郊外都市で20%から35%程度の人口減少に軒並み見舞われているのはなぜだろうか？考えられるのは、既存都市の多くでは雇用の縮小を受けてデトロイト大都市圏外への移住が発生することを受けて人口の減少が発生しているが、そうした人口減少の補填が既存都市ではあまり行われていなくて、まだ市制施行の段階にないタウンシップで散発的な住宅開発が行われているからだと考えられる。

V デトロイト大都市圏の人種別人口動向

デトロイトは人種構成の点でアメリカの中で非常に特徴的な大都市圏である。それは大都市圏人口の90%以上が白人と黒人から成っていることと、とりわけ黒人人口比率が高いことである³⁾。実際アメリカで人口が減少したり低迷する大都市圏は白人と黒人の人口比率が高く、ヒスパニック人口が少ないという共通の特徴がある。第2表の人口減少大都市圏はすべて非ヒスパニックの白人と黒人の人口比率が90%を超えている。

デトロイト大都市圏の人種別人口構成比率を第5図に示す。アメリカでは人種とヒスパニックは別項目であるが、ここでの白人や黒人の項目はすべて非ヒスパニックで、ヒスパニックのカテゴリーに含まれる白人や黒人は含まれていない。デトロイト大都市圏は白人比率が67.9%、黒人比率が22.6%で、この2つを合わせると90%を超える。実は非ヒスパニックの白人と黒人の比率が90%を超えるのは、人口減少大都市圏に共通してみられる特徴で、第2表の人口減少大都市圏はすべてこれに当てはまる。また非ヒスパニック人口の合計が95%を超える大都市圏も同様である。これは近年の移民の大多数を占めるラテンアメリカとアジアからの移民の主要な目的地でない証拠でもある。

またデトロイト大都市圏の人種構成のもう一つの特徴は黒人人口比率が高いことで、デトロイトの22.6%は、人口50万以上の南部以外の大都市圏で最大である。また黒人人口の絶対数で



第5図 デトロイト大都市圏の人種構成 (2010年)

も、ニューヨーク、シカゴ、フィラデルフィアに次いでデトロイトは4位の多さ（総人口では12位）となっている。このためアジア系3.3%（アメリカの全大都市圏では5.4%）、ヒスパニック3.9%（全大都市圏では18.1%）とそれらの比率は低い。

またデトロイトの人種別人口分布の大きな特徴は、中心市のデトロイトと郊外とで対照的な人口分布をしていることである。中心市のデトロイトでは黒人が圧倒的に多く人口の8割以上を占め、一方郊外では白人の比率が圧倒的に多くほぼ80%を占めていることである。大都市圏内の白人人口の98%がデトロイト市以外の居住であるのに対し、大都市圏内黒人の60%はデトロイト市に居住している。黒人の郊外居住比率は40%にすぎず、したがって黒人は郊外人口の11%を占めるにすぎない。このようにデトロイトでは人種別の住み分けが、中心市と郊外で極端である。

それではそうした人種別の住み分けにこの50年間にどのような変化が生じたのかを考察しよう。第4表は現在のデトロイト大都市圏内にある人口25000以上の市別に2010年と1970年を比較したものである。市別の人種別データはセンサスによってしか得られないので、この40年間の比較ということになる。また1970年現在のデトロイト大都市圏はウェイン、マッコーム、オークランドの3つのカウンティから構成されており、これは現在の大都市圏のうち中心的カウンティの地域に該当するもので、これは現在の6カウンティから成る大都市圏の中で実質的な住宅連担地域である都市化地区の広がりとは合致し、大都市圏人口の90%を代表する地域である。

この地域での40年間の人口は420万から386万へと34万人ほど減少している。1970年に成立していた市のうち、スターリングハイツ、サウスフィールド、トロイを除けばすべて大きく人口減少を経験している。デトロイト市は40年間に人口が何と半分以下にまで激減した。これを人種別に見れば、白人人口が増加したのは、スターリングハイツとトロイだけで他の市は軒並みの減少である。これとはまったく対照的に、黒人人口はデトロイトを除きここに掲げたすべての

第4表 デトロイト大都市圏内の市別の人種別人口動向 (1970-2010年)

city	county	人口 (1970)	人口 (2010)	人口増減 (1970-2010)	白人 (1970)	白人 (2010)	白人増減 (1970-2010)	黒人 (1970)	黒人 (2010)	黒人増減 (1970-2010)	黒人比率 (1970)	黒人比率 (2010)
Allen Park	Wayne	40,747	28,210	▲12,537	40,510	26,204	▲14,306	29	604	575	0.1	2.1
Dearborn	Wayne	104,199	98,153	▲6,046	103,825	87,454	▲16,371	13	3,965	3,952	0.0	4.0
Dearborn Heights	Wayne	80,069	57,774	▲22,295	79,720	49,772	▲29,948	12	4,546	4,534	0.0	7.9
Detroit	Wayne	1,511,482	713,777	▲797,705	838,877	75,758	▲763,119	660,428	590,226	▲70,202	43.7	82.7
Garden City	Wayne	41,864	27,692	▲14,172	41,697	25,602	▲16,095	10	934	924	0.0	3.4
Inkster	Wayne	38,595	25,369	▲13,226	21,260	5,194	▲16,066	17,189	18,569	1,380	44.5	73.2
Lincoln Park	Wayne	52,984	38,144	▲14,840	52,767	32,126	▲20,641	5	2,260	2,255	0.0	5.9
Livonia	Wayne	110,109	96,942	▲13,167	109,659	89,159	▲20,500	41	3,309	3,268	0.0	3.4
Southgate	Wayne	33,909	30,047	▲3,862	33,713	26,644	▲7,069	6	1,666	1,660	0.0	5.5
Taylor	Wayne	70,020	63,131	▲6,889	69,680	49,229	▲20,451	20	10,004	9,984	0.0	15.8
Westland	Wayne	86,749	84,094	▲2,655	84,099	63,737	▲20,362	2,234	14,489	12,255	2.6	17.2
Wyandotte	Wayne	41,061	25,883	▲15,178	40,909	24,511	▲16,398	18	339	321	0.0	1.3
Eastpointe	Macomb	45,920	32,442	▲13,478	45,788	21,297	▲24,491	13	9,575	9,562	0.0	29.5
Roseville	Macomb	60,529	47,299	▲13,230	59,681	39,311	▲20,370	606	5,583	4,977	1.0	11.8
St. Clare Shores	Macomb	88,093	59,715	▲28,378	87,692	55,373	▲32,319	167	2,350	2,183	0.2	3.9
Sterling Heights	Macomb	61,365	129,699	68,334	61,077	110,426	49,349	38	6,697	6,659	0.1	5.2
Warren	Macomb	179,260	134,056	▲45,204	178,415	105,088	▲73,327	132	18,123	17,991	0.1	13.5
Farmington Hills	Oakland	...	79,740	55,539	13,848	17.4
Madison Heights	Oakland	38,599	29,694	▲8,905	38,392	24,909	▲13,483	15	1,897	1,882	0.0	6.4
Novi	Oakland	...	55,224	40,313	4,482	8.1
Oak Park	Oakland	36,762	29,319	▲7,443	36,525	10,962	▲25,563	72	16,842	16,770	0.2	57.4
Pontiac	Oakland	85,279	59,515	▲25,764	61,860	20,466	▲41,394	22,760	30,988	8,228	26.7	52.1
Rochester Hills	Oakland	...	70,995	58,309	3,228	4.5
Royal Oak	Oakland	85,499	57,236	▲28,263	85,162	51,941	▲33,221	26	2,435	2,409	0.0	4.3
Southfield	Oakland	69,285	71,739	2,454	68,767	17,876	▲50,891	102	50,432	50,330	0.1	70.3
Troy	Oakland	39,419	80,980	41,561	39,222	59,998	20,776	15	3,240	3,225	0.0	4.0
Wayne County		2,666,751	1,820,584	▲846,167	1,928,500	951,936	▲976,564	721,072	737,943	16,871	27.0	40.5
Macomb County		625,309	840,978	215,669	615,556	717,973	102,417	7,572	72,723	65,151	1.2	8.6
Oakland County		907,871	1,202,362	294,491	875,664	928,912	53,248	28,439	164,078	135,639	3.1	13.6
Tri-CountyArea		4,199,931	3,863,924	▲336,007	3,419,720	2,598,821	▲820,899	757,083	974,744	217,661	18.0	25.2

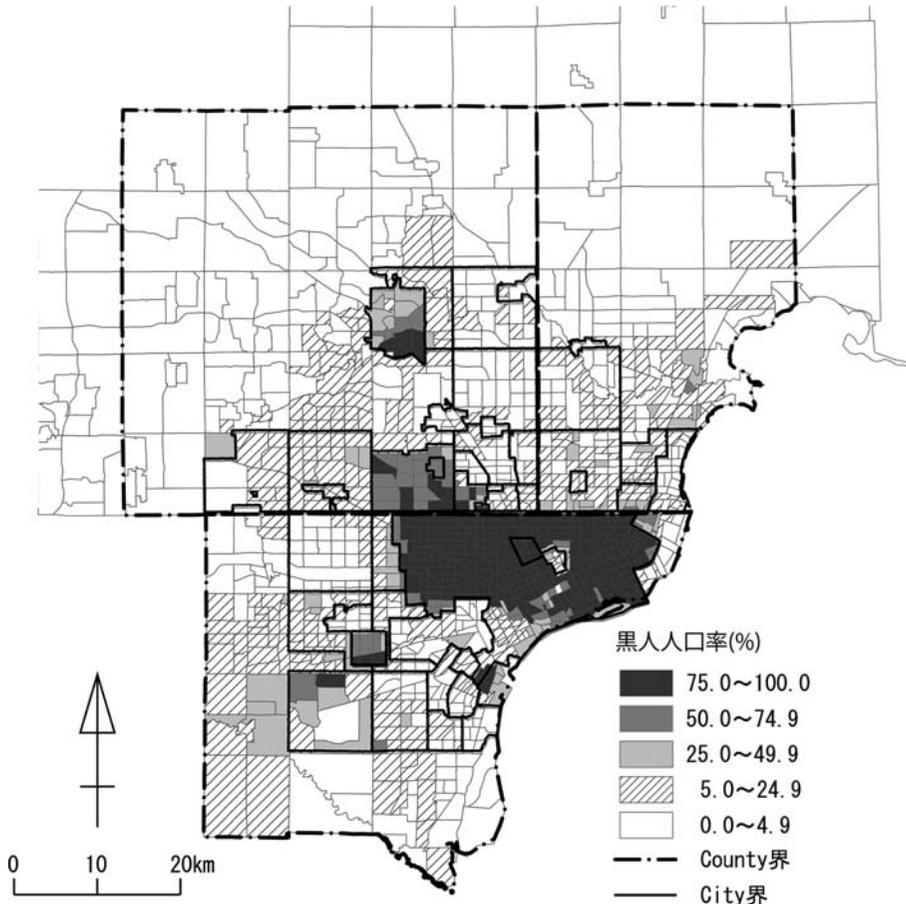
市で増加している。デトロイト市の黒人人口のみ 66 万から 59 万へと 7 万人減少しているが、すべての市で黒人人口が増加した。これはデトロイト市から黒人住民が郊外に広く拡散したことを示している。

さらに黒人人口比率の 1970 年と 2010 年を比較すると大きな変化が見られるのがわかるだろう。1970 年で黒人人口比率が高かったのがデトロイト市 (43.7%) とオークランド・カウンティの中心都市ポンティアック Pontiac (26.7%)、それにデトロイト市の西にあるインクスター Inkster (44.5%) ぐらいである。その他の市はほとんどが黒人人口率 0.0% か 0.1% であった。この当時はデトロイト市への黒人の流入が郊外への「白人の逃避 White Flight」をもたらし、デトロイト市の黒人人口の急増と比率増加に対して、郊外地域での白人人口の急増がみられ、人種別に大都市圏が再編される状況だった。

現在ではほぼ白人専用だった郊外都市の中に黒人比率が増加し、デトロイト市の黒人人口の減少とは対照的に郊外都市での黒人の増加がみられるのである。現在は「黒人の逃避 Black Flight」の時代だと考えられる。中心市デトロイトでの雇用の減少、郊外での雇用の増加を受け、住宅価値の下落に見舞われた中心市の住民が雇用と住環境を求めて郊外への移住に向かっている状況と考えられる。

White Flight はデトロイト市内での黒人の増加に伴って、人種の偏見や住宅価格の低下などを理由として白人が郊外に移動したものであるが、結果的に白人専用地域と黒人専用地域（黒人ゲットー）という強固なセグリゲーションを産み出した。またデトロイト市内のほぼ全域が黒人居住地として充填されることによって、人種的分断がデトロイト市と郊外という地理的分断をも形成することになった。しかし黒人がデトロイト市内から逃げ出す Black Flight は、白人中心だった郊外に黒人が進出することにより、人種の融合（インテグレーション）を促進するものとなっている⁴⁾。

その状況を黒人人口比率をセンサストラクト別に示した第 4 図で確認しよう。第 4 図の黒人人口率の分布図から、中心市のデトロイト市内は市域南西部を除けばほとんどが圧倒的に黒人中心の居住地域で充填されているのがわかる。南西部はメキシコ系のヒスパニックが集中している地域で、市内としては例外的に黒人人口率が低くなっている。しかし高い黒人人口率の地域はデトロイト市域とほぼ重なり、特に市域の北、マッコームとオークランドの両カウンティとの境界を北に越えれば急に黒人人口率が下落する。このデトロイト市と市外との境界、カウンティの境界にはミシガン州道 102 号でもある「8 マイルロード」という名の広い街路が東西方向にまっすぐ延びており、南の貧しい黒人住宅街と北の豊かな郊外の白人住宅街を隔てるバリアとして意識されてきた。『8 マイルロード』という映画が作られたり、デトロイトの市内の市外局番“313”と郊外の市外局番“810”は、貧しさや豊かさをそれぞれ象徴する番号として対比的に用いられてきた。今も 8 マイルロードを境界として人種構成に大きなギャップがあることは間違いないが、今は 8 マイルロードの北にも黒人人口比率が高い地区が見られている。特にオークランド・カウンティのロイヤルオークやサウスフィールドなどの黒人人口比率は、1970 年では 0.2% と 0.1%



第6図 デトロイト大都市圏のセンサストラクト別黒人人口比率

だったのが、2010年ではいずれも50%を超えて57.4%と70.3%となっているのである。

また郊外では1970年にはほとんどなかった黒人人口比率5%以上、もしくは25%以上のセンサストラクトが増加している。ダーデンらは白人と黒人のセグリゲーション・レベルがこの間低下傾向にあり、2000年以降顕著に低下していることを指摘している (Darden and Thomas, 2004, pp.244-247)。このように現在ではデトロイトの人種別分布は、白人黒人のそれぞれの居住専用地区の存在の形態を残しつつも、長期間をかけてセグリゲーションを解消する方向に進んでいることが確認できる。

VI おわりに

本稿ではかつてアメリカの五大都市でもあり、五大都市圏でもあったデトロイトが、ラストベルトの中心都市として1970年以降の衰退・低迷の中で人口分布がどう変化したのかを見てきた。その結果、中心市であるデトロイト市の急激な人口減少と郊外化という時代の中で十分に人口を

吸収しきれない郊外地域の状況のみをみてきた。特に人種的には白人人口の全体的な減少と黒人人口の増加は、かつての中心市から郊外に「白人の逃避」により郊外に白人を中心とする住宅地域が増えていた時代から、中心市を放棄して「黒人の逃避」によりそこに黒人が浸透していくという時代に変化してきたことを検証できたと考える。

デトロイトには、他の都市で近年顕著に見られるようになったダウンタウンの再生・活性化などの兆候がまだまだ少なく、中心市の人口減少も継続している。ただ明るい展望がないわけではない。2010年代に大都市圏人口の減少がおさまってきており、またダウンタウンの再開発の兆候もないわけではない。2017年5月にはダウンタウンのメインストリートのウッドワード通りに路面電車が開通し、アムトラックのデトロイト駅とオフィス街とウェイン州立大学や美術館などの公共施設が公共交通によって結ばれた。デトロイトがコンベンション都市として復活する兆しもある。こうした変化に今後も注目し続けると同時に、人種分布の状況とその変化要因を経済状況や住宅状況と関連づける研究を課題としたい。

注

- 1) 2013年8月に破産申請を行い2014年12月に手続きが終了している。(犬丸, 2017)
- 2) 大都市圏の産業別雇用数は、製造業のみ1980年代から減少し、サービス業の増加率が最大となっている(伊東ほか, 2004)。
- 3) 大都市圏の人種コンビネーションの研究ではデトロイト大都市圏は、ワシントン、フィラデルフィア、アトランタなどととも白人と黒人の2人種コンビネーションパターンに分類できる(樋口, 2006)
- 4) こうした人種的融合は裕福な郊外や低所得な郊外でもみられ、現在では抗議や暴力もなく進行し、人種に関わりなくまかなえる住宅に住み権利は広く受け入れられているとされる。(Farley, 2017, p.67)

文献

- 伊東 理・樋口忠成・富田和暁・藤井 正(2004)。「近年のアメリカ合衆国大都市圏における人口・雇用の動向」関西大学文学論集 54(2), 1-31.
- 犬丸 淳(2017)。「自治体破綻の財政学－米国デトロイトの経験と日本への教訓－」日本経済評論社。
- 樋口忠成(1979 a)。「デトロイト大都市地域の居住分化とその空間パターン」人文地理 31(1), 5-27.
- 樋口忠成(1979 b)。「デトロイトの黒人隔離と黒人ゲッターの拡大」経済地理学年報 25(1), 46-58.
- 樋口忠成(1982)。「都市の居住分化－デトロイトと名古屋の比較－」, 藤岡謙二郎編著『叢書都市3) 都市地理学の諸問題』大明堂. 92-101.
- 樋口忠成(2004)。「デトロイト大都市圏の衰退と再生への歩み」, プロジェクト共同研究組織「都市と文化」『(産研叢書 21) 都市と文化－歴史学・地理学・社会学・文学からのアプローチ』大阪産業大学産業研究所. 161-179.
- 樋口忠成(2006)。「人種・民族構成からみたアメリカ大都市圏の動向」大阪産業大学論集 人文科学編 118, 59-82.
- 樋口忠成・堀内千加・伊東 理(2015)。「アメリカ合衆国大都市圏の人口動向に関する地域的考察－1970年以降の中心市と郊外の分析を中心に－」大阪産業大学論集 人文・社会科学編 24, 1-37.
- Darden, Joe T. and Richard W. Thomas(2013). *Detroit: Race Riots, Racial Conflicts, and Efforts to Bridge the Racial Divide*. Michigan State University Press.
- Farley, Reynolds(2017). *Detroit in Bankruptcy: What Are the lessons to Be Learned?* In Brian Doucet (ed) *Why Detroit Matters: Decline, Renewal, and Hope in a Divided City*, Policy Press. 51-73.

The Changing Population Distribution and Racial Composition in the Detroit Metropolitan Area since 1970

HIGUCHI Tadashige*

Detroit is the largest rust belt city and metropolitan area in the United States. Its industrial decline and population loss began in 1970s. In this article how the population distribution and racial composition has changed in this declining metropolitan area was analyzed. In 1970s influx of black population into the city of Detroit and white flight to the suburbs was the most fundamental population change. As a result of this change the metropolitan area became both geographically and racially divided ; the black central city and the white suburbs. In recent decades continuing industrial decline has led to continuing population outflow from the central city. The black flight to suburbs has consequently begun to decrease racial segregation in the suburban area.

Key words : Detroit, rust belt, urban decline, suburbanization, racial divide

*Professor Emeritus, Osaka Sangyo University E-mail : thiguchi445@hotmail.com